

オープンキャンパスレジュメ 2006年7月23日（日）

漢詩でたどる『三国志』の世界 講師 みのとよひろ 三野豊浩

皆さんも御存知のように、『三国志』の物語には魅力ある人物がたくさん登場します。今日はその中から、二人の英雄、曹操と諸葛孔明にスポットライトをあててみたいと思います。なお、『三国志』には晋代に成立した歴史書（正史）としての『三国志』と、明代になって成立した物語（小説）としての『三国志演義』がありますが、日本では一般に、後者の方を『三国志』と呼んでいるようです。それでは、一緒に『三国志』の世界を訪ねてみましょう。

一、曹操（155～220）

曹操、字は孟徳。後漢の献帝に丞相として仕え、その功績により魏王となり、亡くなってから魏の武帝と諡されました。まだ若い頃、当時の有名な人相見に「治世の能臣、乱世の姦雄」と評されたといわれ、実際『三国志』の物語では悪役として活躍しますが、同時に当時を代表するすぐれた詩人でもあり、数々の戦いの合間に悲憤慷慨の詩を作りました。次に紹介する「短歌行」は、その代表作の一つです。中国最古の詩集である『詩経』と同じ四言詩のスタイルで書かれており、中間部には『詩経』の一節が引用されています。

短歌行 曹操

対酒当歌	酒に対して当に歌うべし
人生幾何	人生は幾何ぞ
譬如朝露	譬えば朝露の如し
去日苦多	去りし日は苦だ多し
慨当以慷	慨して当に以て慷すべし
幽思難忘	幽思 忘れ難し
何以解憂	何を以てか憂いを解かん
唯有杜康	唯だ杜康有るのみ
（中略）	
月明星稀	月 明らかに 星 稀に
烏鵲南飛	烏鵲 南へ飛ぶ
繞樹三匝	樹を繞ること三匝

何枝可依　何れの枝にか依るべき
 山不厭高　山は高きを厭わず
 海不厭深　海は深きを厭わず
 周公吐哺　周公　哺を吐き
 天下帰心　天下　心を帰したり

○杜康　中国ではじめて酒を作ったとされる伝説上の人物。　○周公　周王旦。若い王の補佐役として周王朝の天下を支えた聖人。　○哺　口の中の食べ物。

この詩は『三国志』の物語では、曹操が大水軍を従えて南下し、江南の呉の国に攻め込んだ、有名な赤壁の戦い（208）の直前に、即興で作ったことになっています。しかし実際には、正確な制作時期はわかっていません。前半は人生のつかの間であることを嘆き、酒を飲んでうさ晴らしをしようと歌っています。後半は、広く天下に実力のある人材を求めたいという気持ちをうたっています。自分を聖人の周公旦になぞらえている点が、後世非難の的となりましたが、それでも実際、魏にはすぐれた人物が多く集まり、曹操の政治を支えました。文学の方面でも「建安の七子」と呼ばれる文人たちが曹操の下で創作活動を行ない、また曹操の二人の息子たち、兄の曹丕（魏の文帝）と弟の曹植（陳思王）も詩人として知られ、曹操とあわせて「三曹」と呼ばれています。

時代が下り、北宋を代表する詩人蘇軾（東坡 1036～1101）は、当時の朝廷の政治を批判したかどで罪に問われ、赤壁の戦いの古戦場の近くにある黄州（湖北省黄冈）という田舎町に流されました。そこで書かれたのが、有名な「赤壁の賦」です。その中で蘇軾はこの曹操の詩の一節を引用し、赤壁の戦いの当時を回想して、「固に一世の雄なり」とたたえています。

赤壁の戦いにちなんだ作品は他にもたくさんあります。たとえば盛唐の李白は七言古詩「赤壁の歌 送別」を、晩唐の杜牧は七言絶句「赤壁」を書いています。前述の蘇軾は「赤壁の賦」以外にも詞の「念奴嬌 赤壁懷古」を書き、赤壁の戦いにおける呉の周瑜の活躍を回想しています。

二、諸葛孔明（181～234）

諸葛亮、字は孔明。蜀の劉備に三顧の礼で迎えられて軍師となり、その恩義に報いるべく智謀の限りを尽くします。弱小劣勢の蜀の丞相として孤軍奮闘し、漢王朝の復興に尽力しますが、その甲斐もなく、魏の將軍司馬懿（仲達）との戦いの最中、五丈原で陣没します。亡くなってから武侯の諡を賜ったので、諸

葛武侯ともいいます。言うまでもなく、『三国志』における最大のヒーローです。後半は、その諸葛孔明にまつわる詩文をとりあげてみたいと思います。

諸葛孔明の代表作といえば、何とんでも「出師の表」でしょう。これは、諸葛孔明が魏に対して北伐を行なう際、蜀の後主劉禪にたてまつった上奏文で、大変な名文とされ、『文選』にも収録されています。後世の諸葛孔明を慕う者は、必ずこの文章に言及します。その冒頭を次に紹介します。

臣亮言。先帝創業未半、而中道崩殂。今天下三分、益州疲弊。此誠危急存亡之秋也。

臣亮言す。先帝 創業未だ半ばならざるに、中道にして崩殂す。今天下は三分し、益州は疲弊せり。此れ誠に危急存亡の秋なり。

○先帝 蜀の先主。劉備のこと。 ○益州 今の四川省及び陝西省、雲南省の一部。当時の蜀の領土をさす。 ○秋 「時」に同じ。

南宋を代表する詩人の陸游（放翁 1125～1210）も諸葛孔明の大ファンで、その七言律詩「憤りを書す」の中で、次のようにうたっています。

出師一表真名世 出師の一表 真に世に名あり
千載誰堪伯仲間 千載 誰か伯仲の間に堪えたる

ところで、諸葛孔明は日頃から「梁父吟」という詩を好んで口ずさんでいたといいますが、曹操とは違って、彼自身が詩人だったわけではありません。『三国志』の物語では、智謀にすぐれた軍師として縦横無尽に活躍する孔明ですが、詩の才能では、敵役の曹操に軍配があがるようです。しかし、孔明をしのんで、後世の詩人たちが数多くの作品を書き残しています。今日はその中から、唐代を代表する大詩人杜甫（712～770）の作品をとりあげてみたいと思います。次に紹介する二首の七言律詩は、いずれも杜甫が蜀の都の成都にある諸葛孔明の廟（現在の武侯祠）を訪ねた際の作です。現在、成都には杜甫草堂（浣花草堂）があり、武侯祠と共に重要な観光名所となっています。杜甫は戦乱の時代の中、成都で数年の安らぎの時を過ごしました。

詠懐古跡 古跡を詠懐す 其の五 杜甫

諸葛大名垂宇宙 諸葛の大名 宇宙に垂る

宗臣遺像肅清高	宗臣の遺像 肅として清高たり
三分割拋紆籌策	三分 割拋 籌策を紆らし
万古雲霄一羽毛	万古 雲霄 一羽毛
伯仲之間見伊呂	伯仲の間に伊呂を見る
指揮若定失蕭曹	指揮 若し定まらば 蕭曹を失せん
運移漢祚終難復	運 移りて 漢祚は終に復し難く
志決身殲軍務勞	志は決するも 身は軍務の勞に殲きんとは

《古い遺跡をうたう》その五

諸葛孔明の偉大なる名前は、天地古今に広く知れわたっている。この重臣の遺像は、厳肅で、清く気高い。天下を三分してその一つに割拋するという方策をめぐらし、（そのすばらしきは）永遠に大空高くかける一羽のオオトリのようである。

孔明は殷の伊尹や周の呂尚（太公望）に比べても甲乙つけがたく、もしその方針がうまく行っていれば、漢の蕭何や曹參も問題にならなかつただろう。残念ながら、歴史の流れが推移し、漢の天下はついに回復が難しく、その決意は堅固でありながら、その身は軍務の苦勞の中で力尽きてしまったとは。

蜀相 蜀の相 杜甫

丞相祠堂何処尋	丞相の祠堂 何処にか尋ねん
錦官城外柏森森	錦官城外 柏 森森たり
映階碧草自春色	階に映ずる碧草 自ら春色
隔葉黃鸝空好音	葉を隔つる黃鸝 空しく好音
三顧頻煩天下計	三顧 頻りに煩わす 天下の計
兩朝開濟老臣心	兩朝 開濟す 老臣の心
出師未捷身先死	出師 未だ捷たざるに 身 先ず死し
長使英雄淚滿襟	長に英雄をして 涙 襟に満たしむ

《蜀の宰相》

蜀の丞相だった諸葛孔明をまつる祠堂は、どこにたずねたらよいのだろうか。錦官城（成都の別名）の郊外に、カシワの木がこんもりと茂っている（所こそそれだ）。やしろの階段に映じる緑の草は、おのずから春の色にもえ、葉陰に隠れているウグイスは、いたずらによい声で鳴いている。

劉備は孔明に三顧の礼を尽くし、何度も訪ねては天下を安らかにする計略を

問い、孔明は先主と後主の二朝にわたって苦難を切り開き、老臣として忠義を尽くした。しかし魏を討伐する軍をおこしてまだ勝たないうちにその身は先に死んでしまい、ながく後世の英雄たちの涙を胸いっぱい注がせるのだった。

さて、諸葛孔明をうたっているのは、中国の詩人ばかりではありません。滝廉太郎（1879～1903）が作曲した「荒城の月」で名高い日本の明治時代の文豪土井晩翠（1871～1952）も、「星落秋風五丈原」という詩を書き、諸葛孔明をしのんでいます。大変長い作品なので、冒頭の一節のみを紹介することにします。明治時代の作品らしく、格調高い文語の七五調で全編が貫かれており、「丞相病あつかりき」は、一節の終りごとに繰り返されます。

祁山^{きざん}悲秋^ふの風更けて
陣雲暗し 五丈原
零露^{れいろ}の文^{あや}は繁^{しげ}くして
草枯れ 馬は肥ゆれども
蜀軍の旗 光無く
鼓角^{こかく}の音も 今しづか

丞相 病^{やまい}あつかりき

○祁山 長安（陝西省西安）の西方約300kmにある山。 ○五丈原 長安の西約100km、渭水の南岸に広がる台地。諸葛孔明が陣没した所。

『三国志』にちなんだ漢詩文は、まだまだたくさんあります。もし興味を持たれた方は、是非とも松浦友久^{まつうらともひさ}著『詩歌三国志』（1998年10月、新潮選書）を御覧になってみてください。

それでは、今日の私のお話は、これでおしまいとさせていただきます。短い時間でしたが、暑い中どうも御清聴ありがとうございました。